

~ 13
3961
~~15~~ 17



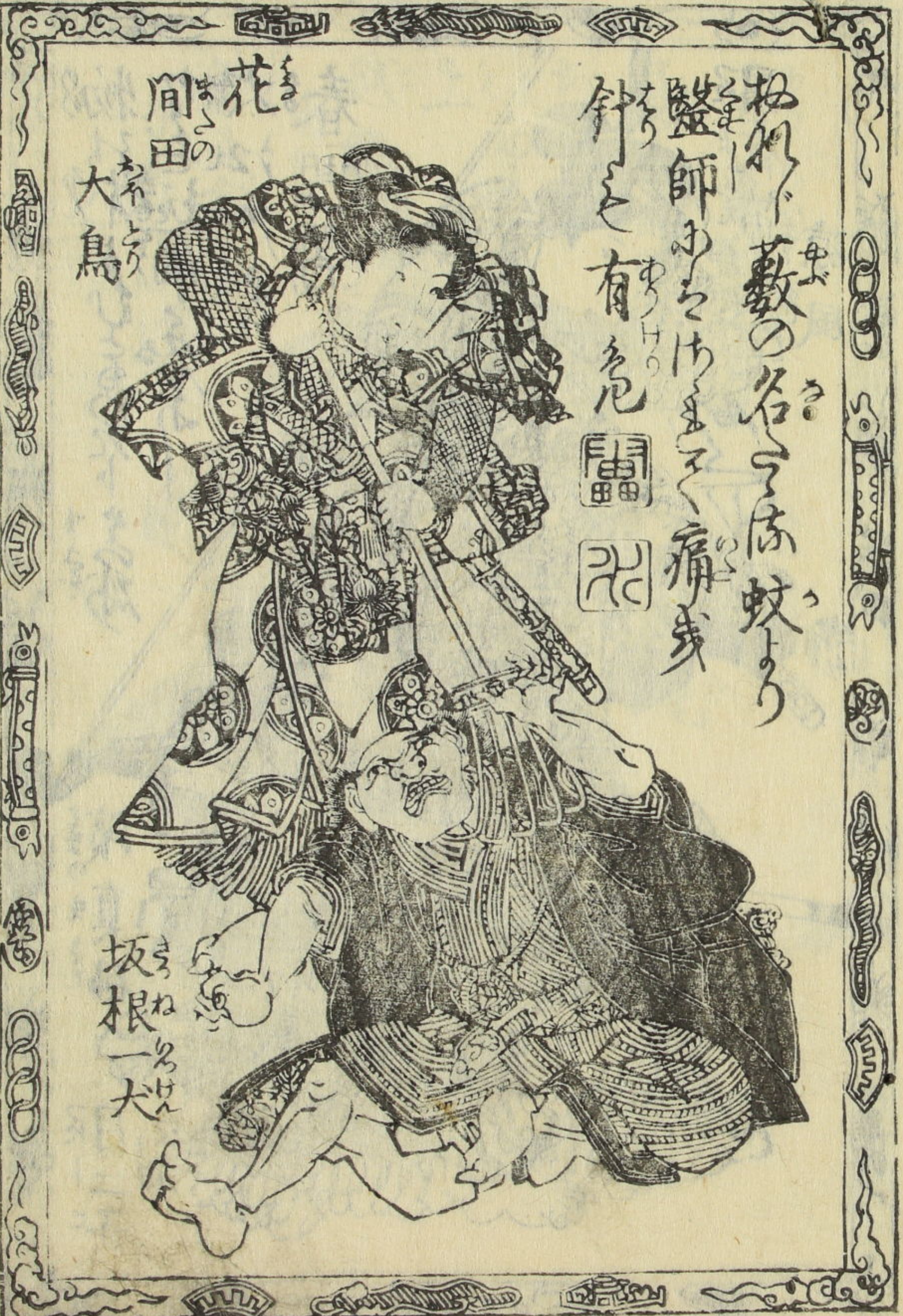
予衛水滸傳の趣向と評と初中後二段の差別あるよしと云ふ是は
 未だ發の說維貫の今在るも必ず予言小從人あるは金聖歎が評
 論の石碣妖と發くは始に石碣妖と鎮るは終る使自是七十回全部
 と云ふ所以といふの謬まるといふ下何と云ふは彼石碣の天降して義吉宿
 因に示せる中段第二の趣向なりその時魔縁を登く竭く宋江等百
 八人西宋の忠臣とまゐるものとして遠を討且方臘を征するの諸説
 あり是の末の一段は猶七十回といふは全部と云ふと云ふ末一段を
 捨る者作者の本意豈然らんや古人といふは讀書百遍初てその
 意の通志と嗚呼書を終る古の難ははくは書を見ることも易く
 是前も論せしと云ふ水滸の善悪を差別する趣向のこれ彼と云ふか
 は邪魔出現の間のまを中武松と張都監と主從人の死怨の

のりとも渠の一家の屠殺ある罪惡最酷なる故に予が這策
 子武松と武世の極る及んで寒風の後室と是を主從と云ふを
 用心のありのまをぬ知音の入り好むるもあらん當日の予を薦めて
 水滸の評と昔有せとの予の亦あの意を察あねど世小説の圖をのり
 まま意味する稀に申斐る所為と云ふのり品の策子は篇毎に序の
 代々の批評を附するは九牛の一毛を寸楮に盡すべしと云ふも猶
 婦幼の厭れせん飽れせん飲抑唐山の俗語と讀得て白るんは欲する
 の字義を穿鑿せず消して趣向の巧拙を評するは通俗本で問合
 する有書の甘味と知らぬ由その過不及の中執る換骨奪胎類今とい
 んの書評の戲筆の一流戲筆ならんも虐せざる本性違つて述を信する

庚寅春正月吉日新版曲亭馬琴識

水滸傳の序





花
間田
大鳥

おれど 藪の名は蚊より
盤師のしらせはまてく痛哉
針と有危

坂根一犬



漏さく
暮く
乃
関
有
越
の
独垣

天
空

鍼目衣
栢楯

上總新司
久景

第八編の端像小
大虫川千楯を
栢楯と録し
其改正を

けのせいのりきりきり

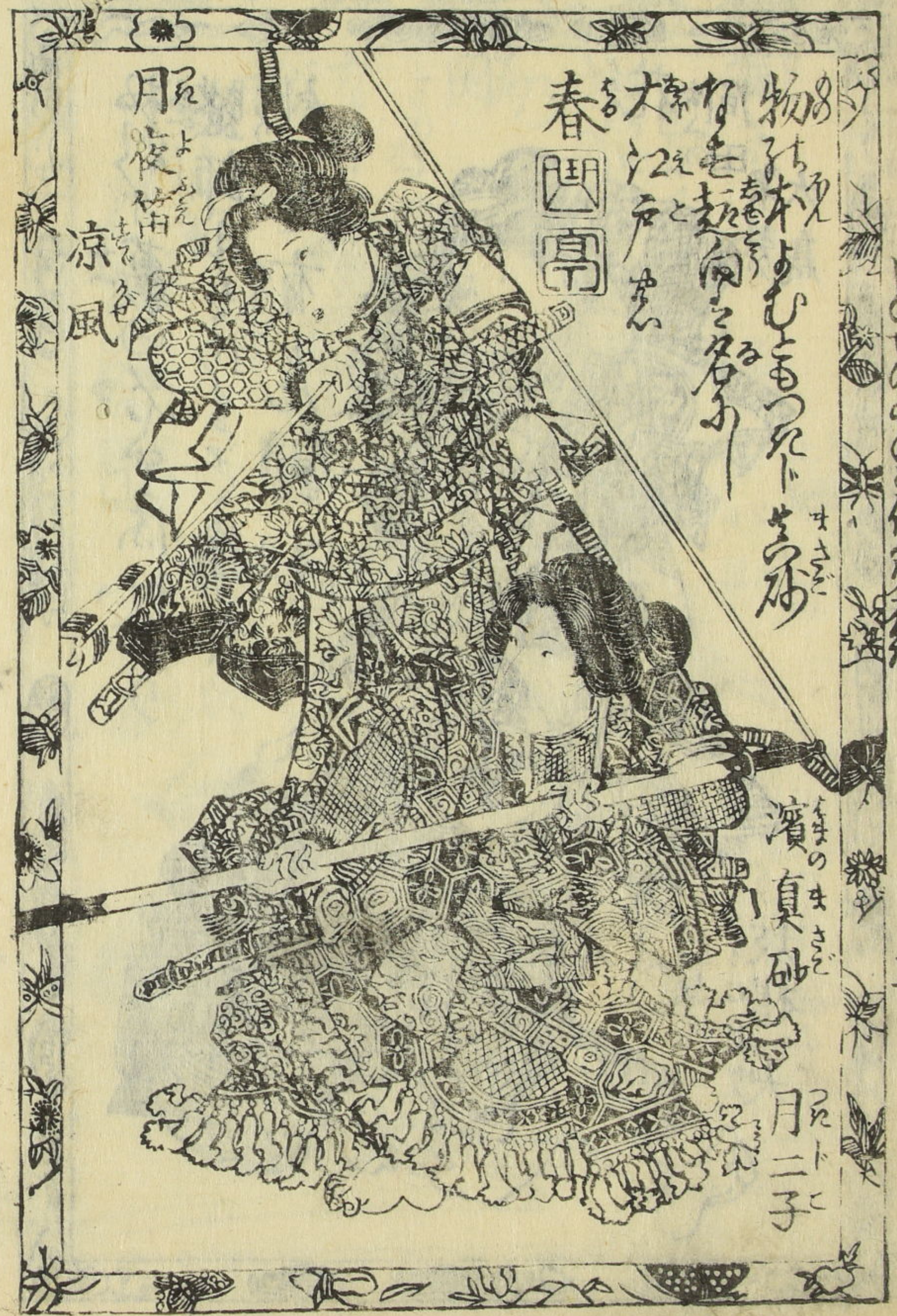
等



波もなご
 越上
 肩の亀の
 尾

馬
 山

蓬萊城
 蓑尾



物持
 春
 大
 江
 向
 名

月夜
 涼風

濱真砂
 月二子

江戸の遊女

一

大正十一年九月



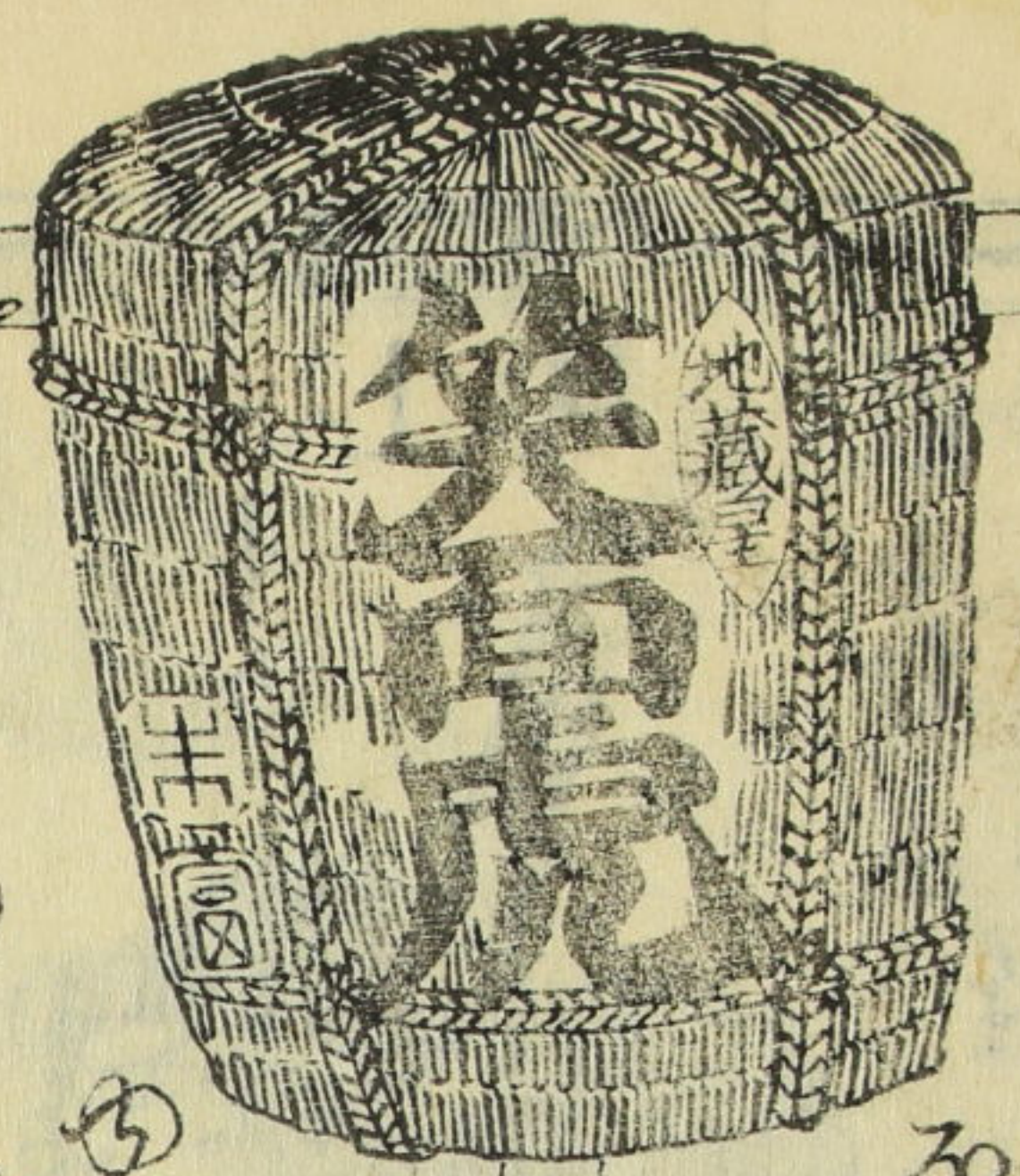
久まぢやの
還道村
辨才天
織物
山媛の
半ち乃ほる・八重機
彩雲

秋色
色小染

園
凡

鹿
六
泉
夫
路
之
力

福



みわげ
水揚乃
あこら
四斗揚
みご

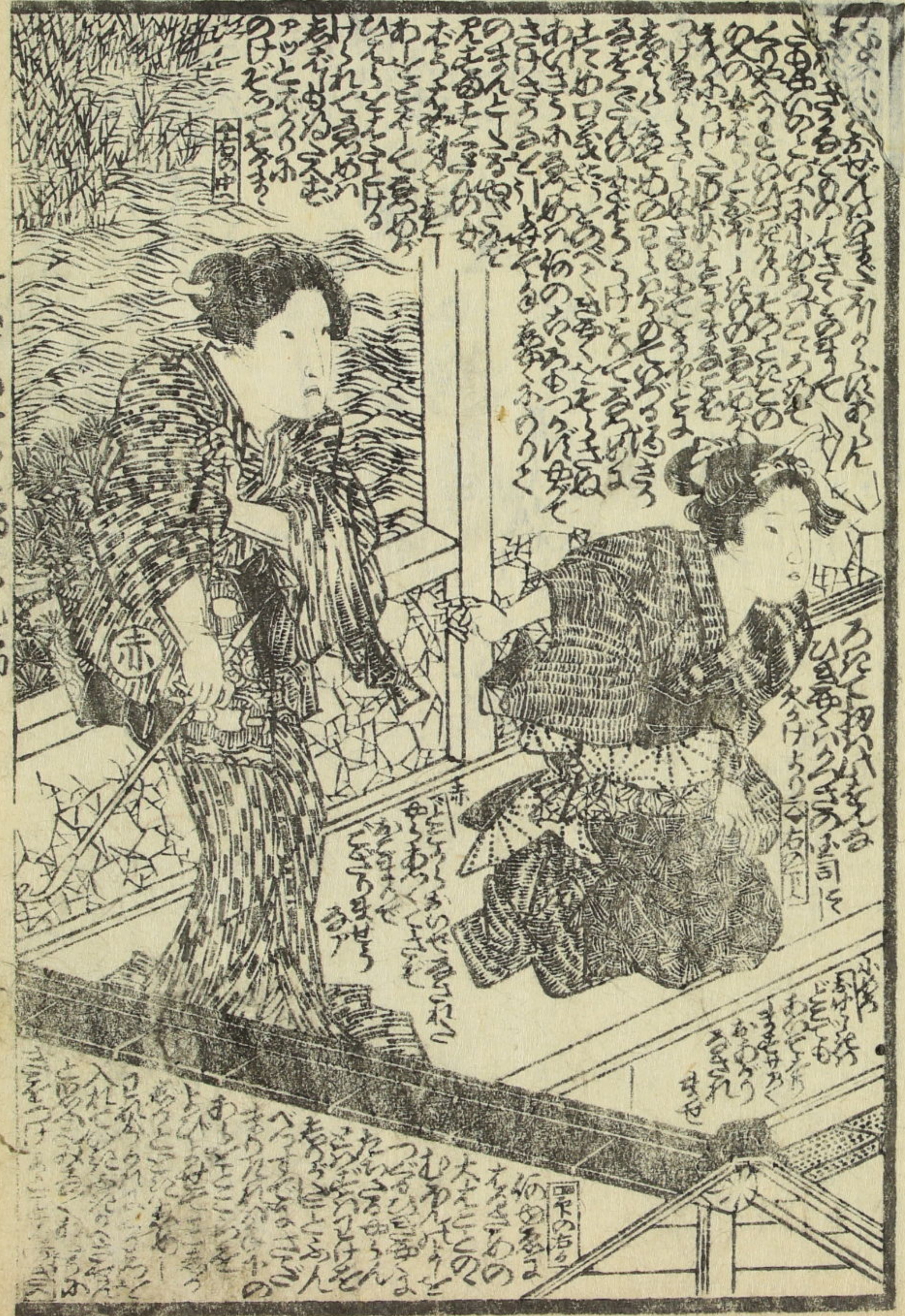
ちんちん
の
頼
月
福



朝笑
富崎

假
力
路
壽

福



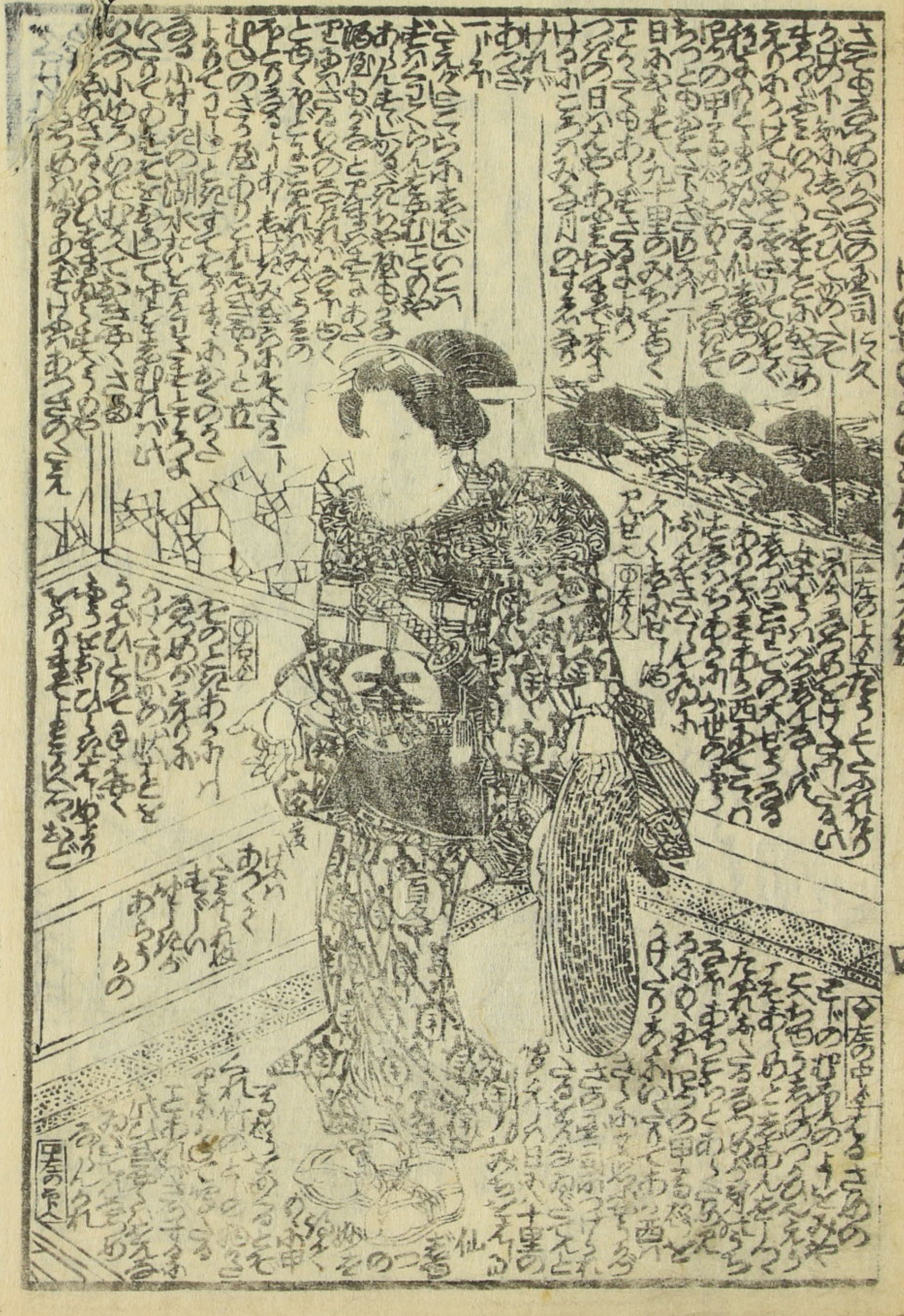
この世のうらみは...
あつとて...
ひそかに...
あつとて...
あつとて...

あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...

あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...

あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...

あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...



あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...

あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...

あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...

あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...

あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...
あつとて...



この物語は、... (Vertical text on the right side of the illustration, likely a commentary or part of the story.)

年代記見聞講譯

初編全編
當年上梓

山東庵京山作

此稗史ハ神代のむら... (Main text block describing the work, mentioning '神代' and 'むら'.)

年中御祝儀日童講譯

初編全編
全部十二冊

山東庵京山作

此稗史ハ正月の松を... (Main text block describing the work, mentioning '正月の松' and '松を').

奉獨舊古今

全一冊

山櫻連々 逸軒 揺舟 合作

此の書ハ巻とまの... (Main text block describing the work, mentioning '巻とまの' and '初め').

